



SPACE No.34

日本臨床心理身体運動学会会報第 34 号 2017 年 10 月 17 日

編集発行 日本臨床心理身体運動学会 会長 山中康裕

第 19 回大会を振り返って

中込四郎（国士館大学）

昨年の 12 月 10・11 日に、「イメージが生まれ、表現される時」をメインテーマとして、第 19 回日本臨床心理身体運動学会大会を筑波大学春日キャンパスにて開催いたしました。参加いただきました会員の皆さまに重ねて感謝申し上げます。

第 2 回大会の主管大学となった筑波大学は、今回が 3 度目でした。この間、つくばの町の変化と同じように、学会大会のプログラムも充実してまいりました。今回は特に、実行委員会のメンバーの多くが体育スポーツ関係者であったことから、シンポジウムならびにラウンドテーブル・ディスカッション（RTD）では、スポーツ色を出させていただきました。前者では、舞踊家の平山素子先生（筑波大学）より、高いレベルでの多様な経験に基づいた話題提供をいただき、その後、学会員が指定討論者となり、“イメージ・創造・表現”をキーワードとして様々な方向に話題を広げそして深めることができました。また、RTD では、会員の武田氏や秋葉氏よりアスリートの心理臨床経験から、“こころとからだ”や“語りの持つ特徴・意味”について話題提供をいただき、フロアーとともに意見交換を行いました。

実は、今回の学会大会抄録集の表紙の作成では、本学の芸術専攻の方々からの協力がありました。表紙を飾った作品「鳥のように」の制作者は言うまでもなく、専門の写真撮影者、ビジュアルアートを専攻する大学院学生、さらには大会テーマのイメージに相応しい作品の決定そして表紙の完成までに関わった方のコラボを実現していただいた先生。こうした様々な専門性を活かした共同作業は、他にはない臨床系の異色な私たちの学会活動や今回の大会を無事に終え、次の常葉大学での 20 回記念大会へとバトンタッチを可能にしたことにも重なるようです。

最後に、多くの会員の参加により、次期学会大会が実り多いものとなることを祈念いたします。

事例研究発表を体験して

大畑 美喜子（川辺やすらぎクリニック）

2016年、筑波大学で開催されました本学会第19回大会に参加致しました。そこで私は第一日目の事例研究発表にて「パニック障害と診断された20代女性の事例」を発表する機会を頂きました。学会での発表は、私がまだ大学院在学中であった2009年に、九州共立大学で開催された際、一般研究発表にて事例を発表して以来の7年ぶりでした。前回の発表では、1時間半があつという間に過ぎ、初めて大学院以外で発表できたことで、どこか満足してしまっていたことが印象に残っています。また、発表後に、ある先生から事例へのご意見をいただき、それに対して「私、なにかと恰好つけてしまうんですよ」と答え、これが次の私の課題の一つだなどと思いながら帰路についたことを鮮明に記憶しています。

さて、今回の発表は、臨床心理士となって5年が経過し、初めての資格更新を終え、ひとつの節目に何か成長のきっかけとなるようなことをしたいと考え挑戦致しました。その貴重な経験を経て反省したことのひとつは、あれほどカウンセラーとクライアントとの関係性が重要だと学んできたにも関わらず、発表の記録からはそれがわかりにくかったことでした。私の中にどこか「事例検討なのだから、クライアントさんの語られたことが大事」ということをことさら優先してきたのかもしれない。しかしそうではなく、カウンセラーがどのような関わりをして、クライアントが変化したのか、そのことを検討できる場にしなければならなかったのだということをどこかに置いてきてしまっていました。とはいうものの、その場でフロアの先生方が納得いくよう、私がきちんと適切な言葉にして説明すればよいのですが、頭の中に漠然とした考えはあっても、それを言葉にして答えることができませんでした。ということは、結局は記述の問題というわけではなく、まだまだその力がないだけである、何となくカウンセラーとしてやれているという心持ちになっていた驕りを今回は痛いほど思い知らされました。そのような拙い発表中、意気消沈しかけそうになっている私に、温かいコメントをくださったりサポートしてくださった、座長の高橋幸治先生、指定討論者の名取琢自先生と廣瀬幸市先生、そしてフロアの先生方には心から感謝いたします。次回は少しでも成長した発表をお聴かせできるようにしたいと思います。

その後、私の事例発表を聴いてくださった方で、若い頃の私を知る何人かの方から「もっと大畑さんらしさを出したらいいのに」と声をかけていただけることが度々あり、『私らしさとはなんぞや?』ということを考えるのですが、果たして以前の私からは何を失ってきたのか、何が違うのか、自分らしさとは…? いったいそのことに気づく日が来るものなのでしょうか。どうやらこれが今後の私の大きな課題となるようです。

一般研究発表で事例を発表して

前田 章（愛知学院大学学生相談センター）

2016年12月10日（土）・11日（日）の2日間、本学会第19回大会「イメージが生まれ、表現されるとき」が筑波大学春日キャンパスにて開催されました。広大な研究施設と実物大のH-IIロケットの見える風景に胸をふるわせて、会場へ到着しました。

私は一般研究発表で遊戯療法の事例を発表させていただきました。今回の事例は駆け出しの頃のもので、砂、水、すべり台など身体感覚を刺激する遊びや、家族のイメージが展開されるなかで、途中から個別から集団へと治療構造が変わるという大きな節目があったものでした。自分が予測できなかった出来事が生じており、いつか事例を見直したいという気持ちとともに、自分の態度に落ち度があったのではないかという不安もありました。

指定討論者の岸本寛史先生には、治療のなかで偶然に生じた出来事について、「その場で生じてくる出来事を、治療的に作用するような流れを作れるか」ということが治療者には大切であるとお話いただきました。さらにフロアにおられた山中康裕先生は、クライアントが家族のなかで体験した出来事と治療の変化とが一致していることを、黒板にジェノグラムを描いて示してくださいました。これまで考えもしなかつたご指摘をいただき、心理療法の場で生じることの不思議さや、布置を読むことの大切さを改めて学ぶことができました。またフロアの先生方にも沢山の質問や温かいご感想をいただき、とても贅沢な学会発表になりました。

後日談になりますが、学会のあと山へ登りました。山頂から下りのケーブルカーに乗り、長いトンネルを潜っている最中に、母の産道から出てくるようなイメージが生じる出来事がありました。そのとき、発表事例のなかの、赤ちゃんを抱いて、何度もすべり台をすべるとい遊びに通じるものを感じ、クライアントがこの世界を懸命に生きようとする姿に思い至りました。今回の学会で発表する機会がなければ、こうしたイメージに思いを馳せることもなかつたかもしれません。今後さらに検討を加えていきたいと思った次第です。

最後に、大会を準備して下さった実行委員長の中込四郎先生、そして暖かく熱心に迎えて下さったスタッフの皆さまに、心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

編集後記

第19回大会のテーマは、「イメージが生まれ、表現されるとき」であった。本学会の本質がそこにあるような気がする。イメージとは、考えることではもちろんないし、思うことでもなく、感じることでもない。観えるものである。そして、このイメージこそが人間の能力の最大のものであり、人間の可能性を現実のものとしてきたのである。イメージをどう扱うか、今回の大会で私が改めて得た課題である。会員の皆様はどうお考えでしょうか。

(前林)

SPACE No. 34
日本臨床心理身体運動学会 会報第 34 号
2017 年 10 月 17 日発行
日本臨床心理身体運動学会
会 長 山中康裕
編集責任 前林清和
事務局 〒541-0047
大阪市中央区淡路町 4-3-6 (有)新元社内
TEL : 06-6221-2600
FAX : 06-6221-2611
E-mail : office@rinsinsin.jp